

『ヤコブの石』 記念教会の発見？

—パレスチナ自治区ベイティン遺跡第7次考古学的調査(2018 年度)—

杉本 智俊 慶應義塾大学文学部教授
 菊池 実 東京基督教大学教授
 渡部 展也 中部大学人文学部准教授
 稲野 裕介 元北上市教育委員会文化財課埋蔵文化財係長
 間舎 裕生 東京文化財研究所アソシエイト・フェロー

Is This Jacob's Stone?

The Seventh Archaeological Expedition to Beitin, Palestine

SUGIMOTO, David T. Professor, Keio University
 KIKUCHI, Minoru Professor, Tokyo Christian University
 WATANABE, Nobuya Associate Professor, College of Humanities, Chubu University
 INANO, Yusuke Former Chief, Department of Culture and Sport, Kitakami City
 KANSHA, Hiroo Associate Fellow, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

杉
本
智
俊
／
菊
池
実
ほ
か

1. はじめに

慶應義塾大学西アジア考古学調査団(団長 杉本智俊)は、2018 年 8 月 8 日(水)から 21 日(火)までパレスチナ自治区ベイティン村のブルジュ・ベイティン遺跡及びワディ・タワヒーン地区において発掘調査を行った。本調査は、同自治政府観光遺跡庁との共同調査である。

本年度の主たる調査課題は、これまでに露出しているビザンツ期の教会堂が何を記念したものかを明らかにすることであった(図 1)。本教会堂は 40 m × 27 m の大規模なもので、中央には何かを記念すると

思われる構造物(中央遺構)が確認されていたが、その内部からは何も検出されておらず、目的も不明であった。紀元 4 世紀の伝承(ボルドーの巡礼の記録、エゲリアの巡礼記及びヒエロニムス)によると、ベイティン村と同定されるベテルの端には、「ヤコブの寝た石」(創世記 28 : 10-22)と金の子牛を非難して殺された「預言者の墓」(Ⅰ列王記 13 : 26-32 ; Ⅱ列王記 23 : 15-20)を記念する教会堂があったとされる。前者は、アブラハムの孫ヤコブが家で問題を起こして逃避行を始める時、石を枕にして寝たところ、天の梯子の夢を見て神の守りを確信したという有名な出来事である。しかし、この教会堂に関しては、本遺跡の他、さらに



図 1 ビザンツ期教会堂のアプスと中央遺構(北西方向から撮影)



図2 中央遺構で確認された不定形に破損された石(東側から撮影)

東1キロほどに位置するヒルベト・マカーティルだとする説も存在しており、その同定は確定されていなかった。

そのため本年度は、記念物や墓が設けられていた可能性が高い以下の地点の調査を行った。①中央遺構のプラスター床下の調査、②中央遺構東側部分の調査、③本遺跡南側の墓の調査、である。また、本年度は④大型貯水池に付属する施設の発掘調査も併せて行った。しかし、紙面の関係上、ここでは①と③について報告する。

2. 「ヤコブの石」の発見？

これまで中央遺構では分厚いプラスターの床以外何も遺構や遺物が知られていなかったもので、プラスターをはがしてその下の状態を調査することとした。プラスターは三層あり、それぞれの層から炭化物を採取して検査したところ、それらはすべて12世紀末から13世紀始めに年代づけられた。すなわち、これらはすべて十字軍期(エルサレム周辺地域に関しては、1095年-1187年、1229年-1244年)の末期に一気に塗布されたことが判明した。

プラスター床の下からは、不規則に破壊された石が隙間なく組み合わされた状態で検出された(図2)。その状態は、大きな板石が整然と並べられた教会堂内陣の床とは様子が異なっていた。また、その全体の上に一辺約2.3mの正方形の切り込みが施されていた。破損された石には大きく平らな石が数点残っており、それらは不定形で、全体に丸く黒光りしていた。一方、それ以外の石は細かく割れたものが多く、黒光りしていなかった。とりわけ北西角には、赤っぽくよく磨かれた石で魚とラウンデル模様が彫刻されたものが2点



図3a 充填材として用いられた Chancellor・スクリーンの破片

はめ込まれていた(図3a)。これらはビザンツ期教会堂の Chancellor・スクリーンの石と思われる、ビザンツ期の建材が、後に床の割れ目の欠損箇所の充填材として用いられたことを示しているであろう。正方形の切り込みの外周にも、二種類の石が用いられていた。黒光りして表面が滑らかな大きな石と小型の板石(幅80cm程度)であり、切り込みの内側と同様である。

正方形の切り込みは、全体に中央遺構の中央から北側に寄っており、北西角、南東角は正確に直交していない。このように雑な設計を当初教会堂が建造されたビザンツ期に行ったとは考えにくい。また、後に充填されたと思われる石も、切り込みに合わせて組み込まれている。この切り込みは、後代にビザンツ期の石と教会堂を再建しようとした時に施されたものであろう。

切り込み内部西側中央の大きな石には、図像が刻線で描かれたもの(グラフィティ)が3点検出された(図3b)。この石の中央東端、すなわち、中央遺構のほぼ中心には四角い図像が描かれ、その内側四隅は丸くされていた。また上辺と下辺には馬蹄形の図像がつけられていた。これは、おそらく中央遺構自体の表現だと思われる。中央遺構は、十字軍期になるとその東側に矩形状の部屋が増築され、形状自体が変化するので、この図像はビザンツ期の様相を描いていることになる。すなわち、このグラフィティが刻まれたのもビザンツ期ということになるであろう。さらに、この図像の南西側には星のような図像、南東部分にも特定できない図像が二等辺三角形をなすように位置していた。

これらの事象を総合すると、以下のようなプロセスが考えられる。

(1) ビザンツ期の教会堂建造時には、中央遺構の中に表面が滑らかで、黒光りする大きな石が存在した。こ

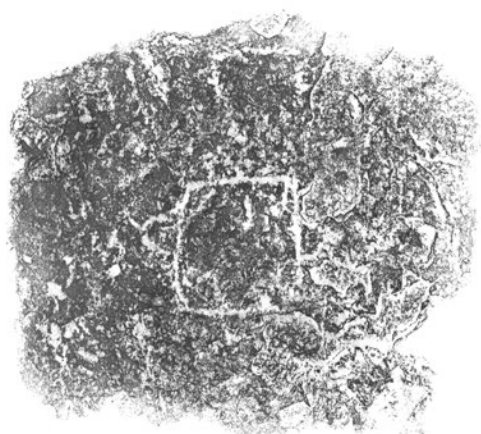


図 3b 破損された石に施された刻印の一つ(東側から撮影)

の石の上には、象徴的な図像が刻印されていた。

(2)この石は、おそらくビザンツ期の終了時に細かく砕かれた。

(3)十字軍期の始めに独立した教会堂が再建された時、破壊された石はできる限り集められ、修復が試みられたが、残った空隙にはチャンセル・スクリーンの石など別の石が充填された。

(4)この石は十字軍期の前半は露出していたが、12世紀の終わり頃、三重のプラスター床で覆われた。

もしこの再構成が正しいとすると、この石はあきらかに特別な崇敬の対象として中央遺構の中に含まれていたこととなる。ビザンツ期の教会堂の中央にこのように特殊な遺構を建造していたことを考えると、まさにこの石の存在そのものが教会堂の建造理由であったと思われる。紀元4世紀の巡礼たちの伝承と合わせて考えると、当時の人々がこれを「ヤコブの寝た石」と考えた可能性は非常に高いであろう。この石の重要性は、十字軍期に破壊された石が再度修復され、新しい教会堂が建てられたことによって示される。もし十字軍期の終わりに施されたプラスターが、予測された破壊からそれを保存するためのものであったとすると、そのこともこの解釈を支持するものとなる。

3. 中央遺構南側翼廊の調査

中央遺構は床全体がプラスターで覆われていたにもかかわらず、南側の突出部(翼廊)ではプラスターが矩形に抜けているように見えた。そのため、ここに地下墓へ続く開口部がある可能性を想定し、トレンチを設定して発掘作業を行った。

その結果、トレンチの下は石灰岩の岩盤となっており、当初想定された墓穴等の遺構は認められなかった。しかし、岩盤には十字状の亀裂があり、南北方向の亀



図 4 南側翼廊から出土した岩盤と亀裂(南側から撮影)

裂は突出部のほぼ中央に位置し、軸と方向があっていた(図4)。東西方向の亀裂は、中央遺構の入口部分の切石の連続上に位置しており、そこから翼廊奥の平石面までの幅となっていた。南西部分は、周囲三方に比べて20cmほど垂直に落ちていた。これらの亀裂は自然作用によるものと思われるが、正方形に垂直に落ちる形状は立石など何かを装填する基礎のようにも見える。

翼廊入口手前東側の石の上からは、赤い二重同心円状の痕跡が認められた。これは、真鍮などの金属製の儀式用の台の鍍金が石に付着したもののように思われる。もしそうだとすると、この翼廊部分にも何らかの崇敬の対象となるものが存在していた可能性が考えられる。ただし、この点はあくまで推測の域を出ない。

4. 遺跡南側の墓の調査

地元住民の情報から、ブルジュ・ベイティン遺跡の塔の南辺から直線距離で約60mに位置する空き地に墓が存在し、近年まで露出していたことが知らされた。この墓の開口部が空き地の立ち上がり面にあったとすると、まさに教会堂と向き合う位置なので、この墓と教会堂には密接な関係があると思われた。特に中央遺構の調査で発見された「石」が実際にヤコブの寝た石を記念したものであったとすると、近くに預言者の墓も存在したはずだと考えられ、これがそれである可能性を検証するため、緊急に発掘することとした。

墓は、南北二基存在した。北側の墓(墓A、図5)は、岩盤の風化などによって天井部を含めた北側部分が崩落しており、入り口部分の位置や形状はわからない。しかし、これは岩盤が南から北へ傾斜する場所に位置しており、それを利用した横穴墓であった可能性が高い。そうだとすると、ベイティン村の他の墓は基本的



図5 墓A全体図(東側から撮影)

に谷に向いているのに、これは逆方向を向いていることとなり、大変興味深い。墓Aの内部は、この「前庭部」から110 cmほど岩盤が掘り込まれて床が設けられている。床の東辺、南辺、西辺にはそれぞれ遺体を安置するための小部屋が1つずつ設けられていた。中央の床部分とこれらの小部屋との仕切りの部分は上部がアーチ状を呈し、ビザンツ期に特有のアルコソリウム(arcosolium、複数形 arcosolia)の特徴を示している。ピットと各アルコソリウムの間には幅約30 cmの立ち上がった壁があり、壁の上面から約45~50 cmほどまで掘り下げられていた。

南側の墓B(図6)については、墓Aとの間に開いた穴を出入り口として土砂を搬出し、清掃を行った。全体的に墓Aと比べて小ぶりであり、床の北辺、東辺、南辺にアルコソリウム型の墓室を持つ形状であった。ピットと各アルコソリアの間の壁の幅は20 cm程度、各部屋の床は壁の上端から40 cm程度の深さまで掘り下げられている。床の北西部分の岩盤は二段階段状に掘り残されており、北西壁天井に設けられた出入り口を通して地上とつながっていた。ワディ・タワヒーン沿いの墓の大半が横穴墓であるのに対して、縦穴から階段で下りる形式の墓は珍しい。

これらの墓は、形態や遺物などからビザンツ期のものと考えられる。これまでワディ・タワヒーンの調査では鉄器時代からローマ帝国初期の墓が知られていたが、その後ビザンツ期にも継続して墓が造られたことが確認された。これらの墓、特に墓Aはブルジュ・ベイティンと正対していることから、ビザンツ期の教会堂と何らかの関係があった可能性も考えられる。しかし、年代的には新しく、伝承の預言者の墓とみなされていた可能性は低いであろう。



図6 墓Bの入口部分(内(東)側から撮影)

5. まとめ

本年度の調査の結果、ビザンツ期教会堂の中央遺構からは特殊な「石」の集積が検出された。これは、その位置、周囲の床との違い、刻印、破壊後修復されたことなどから、初期キリスト教徒の記録に残る「ヤコブの石」である可能性が高い。もちろんこのことは、歴史的ヤコブとの関連性を証明するものではないが、少なくともビザンツ期の人々はそう信じ、これを崇敬の対象としたと思われる。

また、本来この教会堂には預言者の墓も存在していたはずであるが、それは確認されていない。ブルジュ・ベイティン遺跡南の墓は、この預言者の墓としては新しすぎると思われる。墓は、塔の下(アプスの横)あるいは中央遺構北側翼廊の下にあった可能性も考えられるであろう。

今年度、「ヤコブの石」を記念するビザンツ教会が発見されたことは、古代イスラエル史研究の大きな課題であるベテル、ベテルの東、アイなどの地名の同定及びそれに関わる出来事の解釈に大きな意味を持つものとなる。また、キリスト教公認直後のパレスチナ地域におけるキリスト教徒の実態を考える上でも重要な資料となるはずである。

■参考文献

- ・杉本智俊 2014年「ベイティン(ベテル)遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』46号、61-82頁
- ・杉本智俊、菊池実、稲野裕介、間舎裕生 2017年「二〇一六年度 ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査」『史学』第87巻1-2号、165-196頁
- ・杉本智俊、菊池実、渡部展也、稲野裕介、間舎裕生 2018年「二〇一七年度 ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査」『史学』第87巻4号、73-111頁